

岩 溪 と 谷

1991年
夏号 7月～9月
第2号

麦酋長の言いたい放題

最近何故か、またヒマラヤに行きたくなった。登りたい山は6000m峰でも7000m峰でも良い。適当に困難で、少し岩登りがあって、さらに未踏峰であれば申し分ない。

私は以前から登りたい山が二つあった。一つはカラコルムのK7である。これは数年前、東京大学のパーティによって初登頂された。この時はおめでとうという気持ちは全くなく畜生と思った。K7は75年、福岡GCC同人がアタックしたが登れず、その後、再アタックする時は、俺も必ず隊員にいらてくれるよう隊長に頼んでおいたのだが、福岡GCC同人が再びアタックする機会はなかったのである。

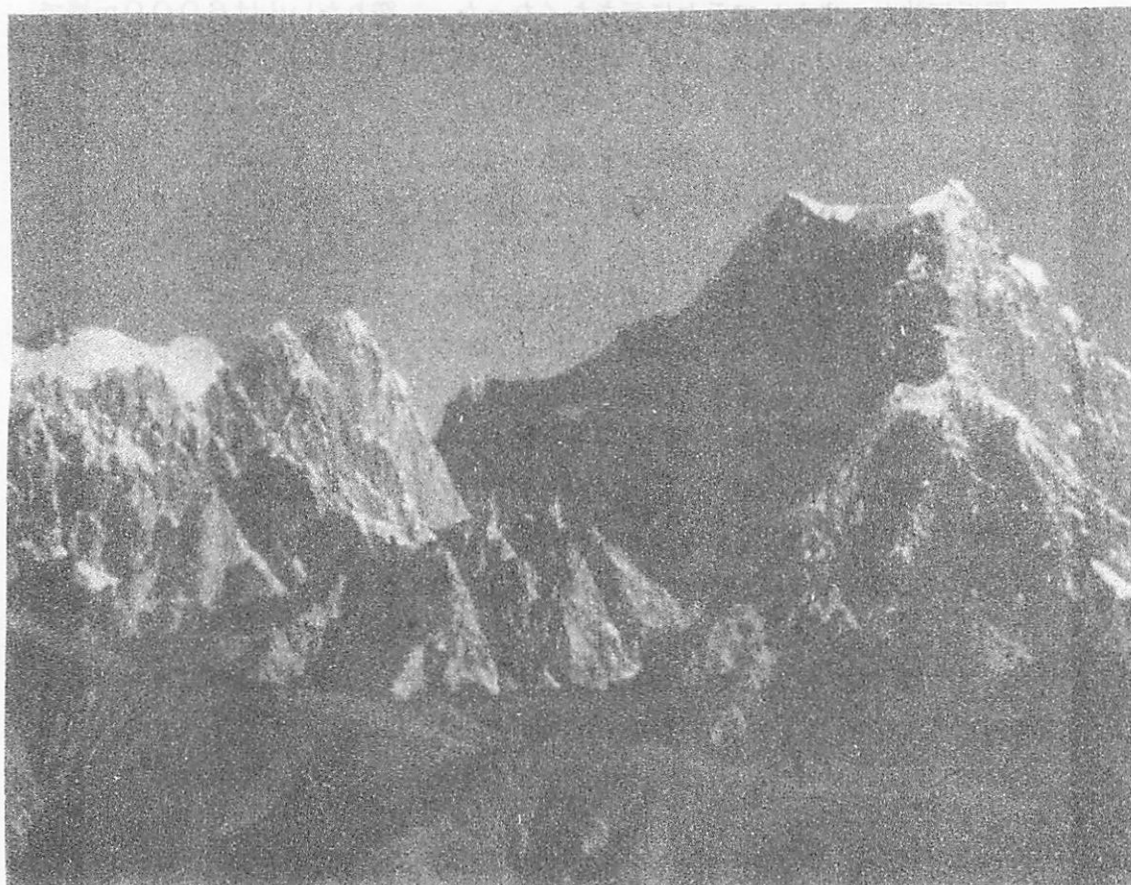
もう一つは同じ75年、わがパーティがアタックしたヒンズーラジのブラッツヨースである。これは適当に困難で少しの岩登りがある程度の山ではなく、非常に困難で大岩壁の山である。もちろん現在も未踏である。私は未踏峰に何故かひかれる。未知、人が誰も入ったことがない。これにはたまらない魅力を感じるのだ。したがって、登りたい山はブラッツヨース一つになってしまったわけであるが、今の私には、この山はちょっと難しすぎるのだ。だから最初に述べたような山に行きたいと言ったわけなのである。それと、別にヒマラヤにこだわっているわけではなく、南米、ニューギニア、ボルネオなどの沢登りにも魅力を感じている。

しかし、単一山岳会ではヒマラヤ遠征隊を出すことは大変困難になってきているのは、何処の会でも同じだと思う。すると県岳連単位で隊を出せたらと誰でもが思うであろう。でも茨城岳連の現状ではそれができない。この件については次の機会にはつきり述べたいと考えている。

県内でもヒマラヤをめざす岳人がボチボチ出てきている。その中で、何処かの主婦連中が登ったり、トレッキング・パミッションで登れる山を登っただけで、俺はヒマラヤのサミッターだと大ボラを吹いている奴が居ると聞く。たいして日本の山を登っていないくせに、聞いて呆れるばかりだ。俺は言いたい。「大ボラ吹く前に、冬の一の倉の壁でも一本登って来い。どっちが難しいか良くわかるから」と。

いろいろ言ったが私自身、家庭の事情とか、いろいろあってヒマラヤに行ける見込みは非常に少ない。だから最後に言った本当のことも行けない者のひがみさ。

（土度助兵衛）



ブラッツコーズ（6 1 9 1 m）

目次

1991年 夏号 7月～9月 第2号 ACCJ-茨城

変酋長の言いたい放題	1
集会報告(7月～9月)	4
山行報告(7月～9月)	5
西丹沢例会山行	6
小川谷に行く	7
西丹沢-同角沢	8
玄倉川ザンザ洞本谷廻行記	9
谷川岳一の倉沢中央稜	11
湯檜曾川本谷廻行	12
巻機山米子沢	14
栗代川廻行	16
穂高夏合宿	18
夏合宿-穂高	19
北穂滝谷P2フランケ早大ルート	
～ドーム西壁雲表ルート	20
滝谷第一尾根	21
北穂高滝谷第四尾根	24
槍ヶ岳回想	25
南アルプス南部回遊記	28
笛吹川東沢東のナメ沢	35
南ア、北岳バットレス中央稜	36
屏風岩-東稜	37
清津川釜川右俣廻行	39
御前ヶ遊窟	40
会津磐梯山	43
編集後記	45

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

7月 3日

出席者 菊池、高田、高木、川上、佐藤

7月17日

出席者 本図、菊池、鯉河、中島、生井、高田、原田、高木、川上、鈴木、佐藤、笹沢

7月31日

出席者 本図、菊池、中島、高田、原田、佐藤、笹沢、村上

8月21日

出席者 本図、菊池、鯉河、中島、高田、原田、高木、川上、佐藤

9月 4日

出席者 本図、高田、原田、川上、佐藤、笹沢

9月18日

出席者 本図、鯉河、中島、高田、原田、川上、佐藤、笹沢、長久保



山行報告

7月 7日	西丹沢 (例会山行)	
	A隊 小川谷廊下	L 鯉河、鈴木、村上、笹沢、川上
	B隊 同角沢	L 高田、原田
	C隊 ザンザ洞	L 高木、佐藤
7月14日	谷川岳一の倉沢中央稜	L 高田、佐藤
7月21日	利根川湯檜曾川本谷	L 本図、原田
7月21日	奥秩父金峰山	村上他 1 名
7月22~23日	富士山	佐藤他 1 名
7月25日	巻機山米子沢	L 鈴木、笹沢
7月27~29日	穂高岳縦走	村上他数名
8月3~4日	南アルプス栗代川	L 本図、鯉河、原田、高田
8月10~16日	穂高 (夏山合宿)	
12日	前穂四峰正面北条新村ルート	L 高田、佐藤
13日	前穂東壁右岩稜古川ルート~北壁~A7エース	L 高田、佐藤
14日	北穂高滝谷P27ラック早大ルート~ ドーム西壁雲表ルート~一尾根	L 生井、本図
	北穂高滝谷P27ラック芝工大ルート~一尾根	L 中島、佐藤
15日	北穂高滝谷第四尾根	L 生井、本図、佐藤
8月19~22日	北アルプス槍ヶ岳	L 鈴木、笹沢
8月23~31日	南ア南部縦走	川上 (単独)
8月25日	笛吹川東沢東のナメ沢	L 本図、佐藤
8月24~25日	北岳バットレス中央稜	L 高田、原田
9月14~17日	北アルプス屏風岩東稜	L 高田、原田
9月16日	清津川釜川右俣	L 本図、佐藤
9月22~23日	越後御前ヶ遊窟	L 本図、鈴木、川上、佐藤、 笹沢、高田
9月24日	会津磐梯山	L 鈴木、笹沢
9月29日	谷川岳幽の沢中央壁 左フェースルート (敗退)	L 高田、佐藤

西丹沢例会山行



西丹沢、玄倉川 概念図



例会山行を終えて、玄倉河原にて（撮影、高木）

小川谷を行く

91.7.7

パーティ L 鯉河仁志、鈴木操、村上晴美、笹沢ひろみ、川上浩史

前日、社長に急用ができたらしく、今回の例会山行はチーム編成が計画時と少し異なり、我が班は大部隊となった。川上、鯉河、笹沢、鈴木、村上（50音順、敬称略）の5人は、鯉河さんのラルゴ号で林道を進み、取付点を探し回ったが見落としてしまい、林道の終点まで行ってしまった。のろのろ引き返す途中で取り付き点を発見し、いよいよ小川谷廊下廻行が始まるのであった。

装備を点検し、河原へ降り、缶ビールとスイカを川の流れに浸し、後の悲劇となるを知らず、川を上流へと向かった。うん、とにかく気分がよい。東京にいる仲間は暑いだろな。俺達は大自然の中、清流に戯れ、泳ぎ、涼む。こんなに面白く健康で贅沢な遊びが他にあるだろうか。

この沢は特別難しくもなく、明るく、水もきれいだし、泳ぎ回るのにもってこいである。みんなは僕を変態のように眺めていたが、僕自身は泳ぎに来たと思っているので、へつり等せずに水につかる。まるで河童である。

滝が出てくるとザイルを結び、要らなくなると片付け、とにかく楽しかった。今回は闘争心に燃える登攀ではなく、みんなで夏に川原で涼む山行だ。廻行も終わり、車に戻って着替える。

さあ、今回のクライマックスの、河原でのビールを飲みながらのスイカ割りだ！取り付き点から降りると、スイカはもはや原型をとどめておらず、辺り一面に破片が飛散しており、見るも無惨な姿をさらしていた。絶望のどん底で、悲嘆にくれる我々におっさんが声をかけてきた。おっさんは、「カラスがスイカをつついてたよー」

我々は無言でスイカを片付け、ビールだけ持って車へ戻ったのだ。

(川上 記)



西丹沢一同角沢

91.7.7

パーティ L 高田暢年、原田真由美

7月の例会山行は3パーティにわかれ、私と原田さんは同角沢へ入る。この沢は西丹沢でも有名な沢で、以前より入ってみたいと思っていた沢である。

7時、ザンザに入る高木、佐藤パーティと別れる。取り付きに「沢登り注意」の標識があり、いかにも人がいっぱい入っている沢であるのがわかる。

沢の取り付きでザイルを出す。最初の三重の滝は鎖が残っており、これを利用して登る。こんな感じでずっと鎖がついている沢なのかと思ったが、それはここだけであった。その先に不動の滝(20m)が現れた。ルート図を見ると、瀑水を浴びて右にトラバースとあり、確かにそのルートの通り残置シュリングが下から見える。しかし水量はけっこう多そうだ。あの瀑水の中に入り込んで行くのは少し勇気が必要である。が、しかしいつまでながめていてもしょうがないので、度胸を決めて取り付く。トラバースの時は、瀑水がもろザックに当たり、体がひきはなされそうであった。

その後は、小さな滝をいくつか過ぎた後、無名の滝(25m)が現れた。ここも瀑水を浴びながらトラバースするところである。私はこのような滝はあまり得意ではないので、原田さんにトップを交代してもらった。セカンドは気楽なもので、トップが水浴びをしながら苦労して登るのを下からヘラヘラしながら見てられる。彼女は、トラバースの後、右壁をアブミのかけかえで直上してしまった。私はアブミがない為、上から彼女にアブミを投げてもらったが、取り付いてみると直上ルートの左側のルンゼがフリーで登れそうだったので、こっちを登った。

その後は、遺言棚(45m)を越え、稜線着(11時)。東沢乗越を経て小川谷に出る。

玄倉の河原に着いたときは、小川谷廊下パーティ、ザンザパーティはすでに着いていた。ここで3パーティ無事下山を祝ってビールとスイカで乾杯をし、帰路についた。土浦9時着、

(高田 記)

玄倉川ザンザ洞本谷遡行記

91.7.7

パーティ L 高木均、佐藤文則

高木は小川谷の予定であったが、メンバー編成の都合でザンザ洞に変更となる。相棒は若手のホープである佐藤君である。彼とは5月の小割沢でも一緒に、岩登りの腕前は確かなので安心であった。同角沢に向かう高田、原田パーティを送り、鈴木さんのバジェロでユーシンまで入る。

ユーシンロッジに向かって左側の道が下山道であることを確かめ、右側の小道を進む。裏山のような道をペンキに従って登ると左岸の古い道となった。利用する人が少ないためか、手入れしていないので、ところどころ木の橋が朽ちてなくなっている。廃道といってもよい。途中で佐藤君が藪で目を突くというアクシデントがあったが、大丈夫ということで先へ進む。道が崩壊のためなくなっているところから沢に降りる。佐藤君は溪流靴にはきかえるが、高木はわらじを車の中に忘れてきたことに気づく。取りに帰ることも考えたが、「丹沢は登山靴でも登れる」という話を思いだし、地下足袋のままで登ることにした。

ユーシン沢二股で他のパーティとの交信を試みたが、果たせなかった。この後も下山するまで全く交信はできなかった。ザンザ洞に入るとすぐに二ノ沢出合となる。本谷F1は二段20m、二ノ沢F1は15m程度である。高木トップで二ノ沢F1を4m登り、本谷F1下段の滝を右からからんで落ち口に出ようとするが、取り付けがかぶっていて手ごわいので、すぐにあきらめる。ハーケン1本打ち、二ノ沢F1の左側を上部の連打したハーケンを積極的に利用して（つまりAOで）登る。滝の上から左の巻き道を利用して、本谷のF1をすべて省略する。

続く10mの滝は左側を登るが、残置ハーケンがないので、核心部の手前で苦労してハーケンを打つ。しかし、もろい岩の割れ目に下から上にしか打てない。単なるおまじないの様なものである。つるつる滑る足場はあてにならず、衰えの目立つ腕力を駆使しながら、冷や汗タラタラでなんとか登りきった。佐藤君は涼しい顔をして登ってきた。ハーケンが打たれた岩の裏側はがらんだのが下からまる見えだったが、黙っていたとのこと。暖かい思いやりにおもわず涙がでた。

沢が大岩でふさがれたところでは、左側の滝を登らず、右の凹角を登る。簡単。続く10mのなめ滝は佐藤君トップでいく。途中でハーケンを一本打つ。このハ

ーケンを抜くのは、冷たいシャワーの下での作業が必要であった。佐藤君ありがとう。象の鼻はカンテを登る。出口の一步が難しく、蜘蛛の糸のように垂れ下がったシュリングを大いに頼りとする。

水量比1:1で入る四ノ沢を過ぎ、どんどん登るといよいよ二段20m大滝である。一見しただけで、登攀意欲が減退していく。左側にシュリングが3本垂れ下がり、ルートであることを示しているが、下段の滝の出口はほとんど垂壁である。一方、正面の水流にそってバンドが走り、そこが登れそうだと佐藤君は主張するが、途中でハーケンが打てず上部で高度感に悩まされそうである。わらじがないのを口実にして佐藤君を説得し、高木が右のガリーから大きく巻き、上からザイルをおろして佐藤君のみ登ることにする。木登りのような高巻きで落ち口にでる。9mmザイルをダブルにして放り投げるが、途中の棚にザイルが引っかかって下まで届かない。3、4回繰り返してもダメで、おまけに落石まで起こるのであきらめる。

その上はすぐに水がなくなり、ガラガラの沢となる。ルートの選択がうまくでき、苦勞することなく稜線のコルにはいあがる。同角沢の頭や小川谷につづく山並を眺めながら、軽く食事をする。そして、快い疲労を感じながら、のんびりとユーシンへと下った。丹沢は山のスケールが小さいので、沢を登っていても圧迫感がなく、私の好みである。

ユーシンロッジ (7:00) - ユーシン沢二股 (8:00) - ザンザ洞出合 (8:30)
- 稜線 (12:00~12:15) - ユーシンロッジ (13:40)

(高木 記)



谷川岳一の倉沢中央稜

91.7.14

パーティ L 高田暢年、佐藤文則

一の倉沢出合は今日もくもりだ。くもりというより雨が降りそうだ。どうするのだろう。とりあえず朝めし。いつもの通りコンビニのおにぎりとパン。

6時20分出発。出合で水を汲み、雪渓を目指す。前回来た時は雪渓が崩れかけていたが、今日は最初から夏道に行く。途中で雪渓に下り、テールリッジにとびつく。テールリッジの途中で雨がパラつく。後続が戻って行くのが見える。しかし高田さんの口から「戻ろう」の声はない。

中央稜基部で登攀具をつける。今日は谷川で初めてトップを引く。いやがおうにも緊張する。ハーネスをいつも以上にしっかり締める。準備よし。まずは高田さんから。濡れてはいるがまずまず快適である。(ホールドがしっかりあるからだ)すぐに先行パーティの声が聞こえ始める。2P目佐藤のトップ、易しい所だが緊張が高まる。カンテのような所を回りこんだ所で先行パーティに追いつき、ピッチを切る。ずいぶん登った気がしたがザイルの余りは長い。高田さんトップの3P目、やはり先行に追いついたようで待ちながら第二フェース下部まで行く。4P目核心部を佐藤が登る。先行に追いつき核心部手前で止まっていると、下から「行け、抜いちゃえ」の声。

よし行ったらやんけと思ったが、出だして一歩つまずいて、ルートを確認し直して出発。先行の2nd、3rdを追い越し、ザイルを追って登る。ホールドがない。IV、A0ではあるが、先行のザイルがかかっているハーケンが使えない。うーん。

「高田さん、動けません」と叫ぶ。叫んだところでしかたがない。上で確保に入っている先行さんにシュリングをかりることを断り、なんとかクリアー。あとはテラスに乗越すのみ。が、ここもハーケンは使用済み。しょうがないから左手をかまして、右手があることを期待してエイヤッとばかりに体を持ち上げると、ホールドがなかった。ズリ、左手一本になって体を支える。足をフリクションでなんとかしようとするが、ズリズリ滑る。残置シュリングを見つけ、そいつを右手でつかんでやっとこさテラスにのる。フー、助かった。高田さんがなんなくクリヤーして上に行く。

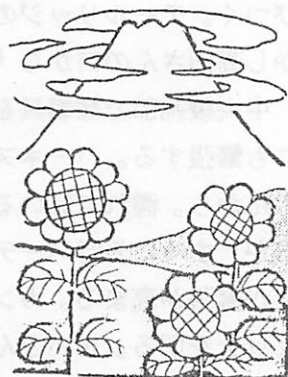
トップを替わって佐藤の時に、どこが確保点かわからず（懸垂の支点があったので）あまりよくない所で切って、まだまだ上だと知り、気を取り直して登る。ほどなく終了。テールリッジの下りを恐れていたら、衝立前沢へ降りるとのこと。怖い思いをしなくてすむ。Lucky! 前沢に入り、ガンガン下り、前沢出合で残雪にショルダーで登って、走るように雪を下り終了。車に乗って、つくばへ向かった。

（佐藤 記）

湯檜曾川本谷遡行

91.7.21

パーティ L 本図一統、原田真由美



嫌いだ嫌いだと言いながらも山行を重ね、やっぱり楽しいかなと思い始めたのが沢登り。今年はけっこう行ったな・・・中でも楽しかったのが、ここ湯檜曾川本谷だ。メンバーは本図さん。（最近、どうも沢にのめり込んでいるらしい）そして私である。時は7月21日。天気、快晴。

誰だったか、「自分はコースタイムをとったり、遡行図を書いたりしながら遡るのは大嫌いだ」と言い切って記録を発表した人がある。まったく私も同意見で、あれは登高中の熱中と放心を中断させるおろかしい行為に他ならない。まあ”面倒”という思いも多大に入っているが・・・。何にしろコースタイムの記録は、すべて本図さんにお任せしたので文中には記さない。（最後にまとめて記すことにする）

さて今回の山行であるが、下館を出発し現地駐車場に着いたときには、すでに数パーティの天幕が張ってあった。翌朝ながめてみるとどうも釣り師らしい。駐車場を出発し、湯檜曾川右岸の樹林をたどる。昔は谷川岳に来ると、良く利用し

た道だそうだが、私は初めてである。道はしっかりし、今でも使われているようだ。しばらく歩くと、虹芝寮があった。ここで「あと40分!」と、本図さんから声がかかる。私がアプローチを苦痛に思うことを、どうも知っているらしい。

本谷に出るとすぐに魚止めの滝が現れた。ここから先は釣り師は入らない。いよいよ遡行開始だ。魚止めの滝を越し、ゴルジュを抜けると、とたんにそこは別世界。そこは一枚床のナメとなり、とっても明るかった。このまま先へは行かずに水遊びでもして楽しみたい気分になりながら、のらりくらりと先へ進む。ウナギ淵と呼ばれる暗くて長い淵を抜けると、3段30m大ナメから十字峡は絶景かな。途中スノーブリッジをくぐり抜けたが、あれはなかなか緊張する。急いでくぐり抜きたいが、水の中にある石ころが邪魔をする。転んだひょうしに大声をあげて、雪溪が落ちてきたら一貫の終わりだ。それがわかっていながら、ドジってしまうのが私である。息をするのも忘れて一気に駆け抜けた。

十字峡を過ぎるとナメ滝と釜が連続する。岩の上を矢のようにすべる清流、豊かな水量をいく段にも落下させて豪快な水しぶきをあげる滝。これらにワクワクしながら大いに楽しめた。へつりの途中、足をすべらせドボンと首まで水の中につかっても、思わず笑いがこみあげた。明るく暖かいところで昼食をとったが、途中途中、本図さんが採取していたアブラコゴミが、昼食となる冷やし中華の具となった。見た目は黒いプチプチが汚らしいが、こわこわ食べてみると、山菜特有の苦みがちょっぴりあって、これがとってもおいしい。こんなにおいしいなら、私も採っておくんだって後悔したほどである。

最後の10m垂直の滝、および40m大滝は文献どおり、直登するには高圧放水による窒息死が確実であったため、水流からのがれてクリアーする。右岸から入る峠沢から登山道に出たのは12時少し過ぎだったと思う。

私は長いアプローチは嫌いだ。しかし同じように長い下山も嫌いである。登山道に出てからの下山が長かった。一気に下りたいのに平坦な道がダラダラと続く。延々4時間ほどかけて駐車場に戻ったのである。しかしながら、この山行は私に沢登りの楽しさを教えてくれたものであり、最高に楽しんだ山行であった。

駐車場 (5:40) - 虹芝寮 (6:15) - 武能沢 (6:40) - 出合 (7:10) -
十字峡 (8:45) - 昼食 (10:30~11:15) - 峠の沢 (12:15) - 登山道 (12:33)
武能沢 (14:40) - 駐車場 (16:00)

(原田 記)

巻機山米子沢

91.7.25

パーティ L 鈴木操、笹沢ひろみ

「明るくて、大きなスベリ台のような沢があるんだ」と鈴木さんの話に誘われ出かけた。前夜21時下館を出発。巻機山の大きな駐車場には3台ぐらいしか車がなかった。平日ということで入山者も少ないんだと思い、いつものパターンでビールを少し飲み入眠。

しかし5時頃なんだかさわがしく、窓をあけたそいてみるとジャージ姿の小学生と父兄があふれんばかりいる。どうやら夏休みの林間学校？といった感じで、私達も出発の準備を始める。準備をしながら、校長先生のあいさつや小学生の代表者のちかいのことば、などを聞いていたら、なんともノスタルジックな気分になってしまった。

一行は登山道へ、私たちは米子橋を過ぎ、大きな石がゴロゴロころがっている河原をだらだらといく。稜線で会えるかな？なんて思いながら1時間位で滝があらわれた。そこから先は次々と滝があらわれ、左に巻いて進んで行った。2度目の沢登りということで「沢登りってなんて楽しいなー」と思っていたら、20mぐらいの滝がバーンとあらわれた。そこで鈴木さんは「もしおれがこけて、頭ぶつけて意識がなくなっちゃったらどーすればいいか教えとくからな」と急にシビアな話題となり、急に緊張し始める。そんなことあるはずない。あつてはならないと思いながらも、いつでも危険とは背中合わせだし、充分注意していたつもりが・・・ってこともある。このことは今回だけでなく今後も必要な知識であり、充分に頭にたたき込んだ。

途中また20mぐらいの滝を左に巻いたとき、やぶこぎしながら高巻いていったが道に迷い30～40分ロスタイムとなる。それからどんどん進み、どこだか忘れてしまったが、大滝を左に巻いたとき、久々に究極のスリルを味わってしまった。滝のすごい音で鈴木さんと意志の疎通ができず、ザイルが引っかかってあがることできない。どなっても声が届かず、ザイルはピンとはったまま。バランスをくずしたら滝つぼに落ちそうで、戻るに戻れない。進むときにちゃんとザイルをさばいていなかった私が悪いのだ。「どーしょう・・・」とただあせるだけで、ザイルをなんとあおってもピンと張っていてダメ。とっさに考えついた

のが自分のザイルをほどく、ということで、手、足がガクガクふるえた。ザイルをほどき、30~40cmゆとりが出たので速やかにザイルをあおりやっとならした。すぐにハーネスに通してむすばなくっちゃ！と思ったらまたザイルがピーンと引っ張られ結べない。こうなったらどーでもいい、と開き直り、適当にむすんで鈴木さんの所まで行った。20分くらいグスグスしていたので鈴木さんも「これは何かあったな！」と思い、途中まで来てくれる。顔を見るなり、子供のように大声で泣いた。今考えてみるとまったくバカみたいだ・・・。

それからまた気を取りもどし進むと、大ナメが始まった。聞いていたのと同じ明るくって左右には稜線が見えて、草原の中のプールのスベリ台と行った感じのナメが続く。さっきの出来事もすっかり忘れて感動していた。こんなすばらしいところをリフトをつくって、スキー場にするという計画があるということを知って悲しくなった。

思ったより時間がかかり巻き機山のピークを踏むことはやめ、カレ沢を登り避難小屋へ。辺りはニッコウキスゲの大群生した草原で、なんとも気持ちがよい。お天気はずーとくもりで暑くもなくちょうど良い。朝あった小学生はどーしたかなあと思いながら、稜線を下る。今回の山行、つらいこともあったけどなかなか充実した山行だった。鈴木さんには恥ずかしいところを見せてしまったけど、この経験は今後の山行のステップとしたい。

ps こんど沢に行くときは「ふえ」を忘れずに持って行かなくっちゃ・・・

(笹沢 記)



栗代川遡行

91.8.3~4

パーティ L 本図一統、高田暢年、原田真由美、鯉河仁志

まだ眠い体に気合いを入れ、林道より栗代川を目指し5時出発。最初15分ぐらい谷そこを目指し、長い下りである。足がガクガクしてきたころ入渓地点の取水口に着く。ここで身支度をする。これから現れるだろうゴルジェや滝を思うと、体に熱いものを感じる。

取水口より進むと、最初の廊下である八丁暗見の岩峽に入る。次の箱淵と言われる大きな淵も腰ぐらいでなんの問題もなく通過。少々物足りない感じである。やがてユスリバ沢の出合となり、次に曲がり淵の廊下となる。この辺両岸は50mはある岩壁に閉ざされ、太陽の光も届かず、暗く物凄い圧迫感である。ゴルジュや小滝の通過は、我を忘れそうになるほど楽しい。ここから曲がり淵、鶴の天、龍言淵を予定通りに通過する。私も何度かトップに立ち、全員で頑張る。

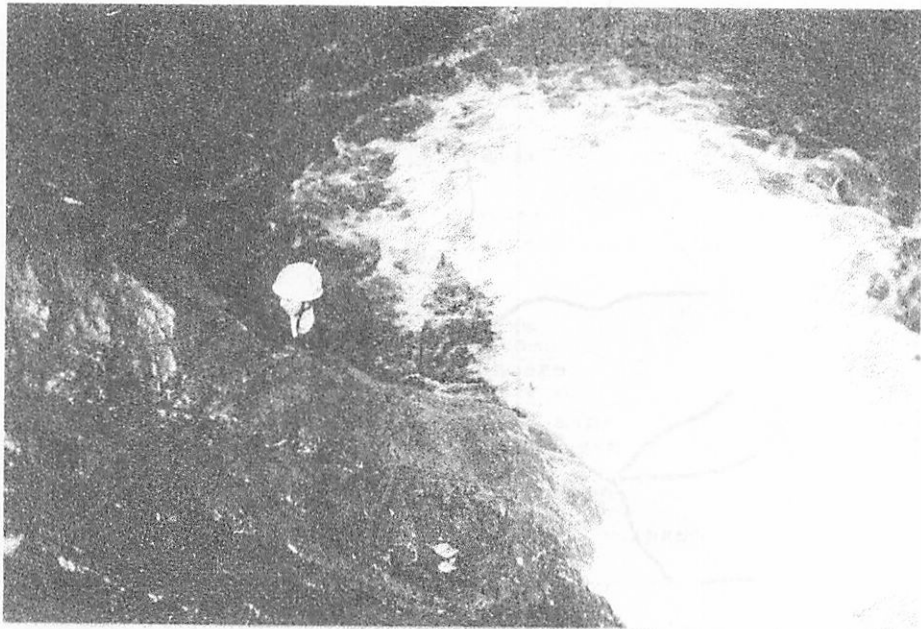
栗代川最難所の竜神の瀬戸の入り口に11時30分に着く。予定より早いので安心する。本図が偵察を行い、予定通り沢通しに行くことにする。深く流れの速い淵、濡れた岩、効きの甘い支点と次々と現れる悪場も本図のリードで問題なく突破する。木葉沢出合より両岸が開け、古い吊り橋の下で野営することにする。

薪を拾い集め、焚火で濡れた物を乾かす。もうこうなると頭の中は夜の酒のことしか考えない私である。本図が天ぶら用の山菜を、私が岩魚を調達して、山菜の天ぶらと岩魚の天ぶらで乾杯となる。しかし酒がビール1本しかなく、がっかりする。この夜は激流を突破した満足感でいつのまにか寝てしまう。

8月4日、今日は問題となる場所もないので出発も自然とゆっくりになり、7時出発。野営地点より広い川原が続き、しゅうもと沢の出合で谷は大きく右に曲がり、巨岩が重なり合う中を登り、11時栗代川林道の倉沢橋に着く。倉沢橋より荒れ果てた栗代川林道を下り、3時に車に着く。

8月3日 車止発(5:30) - 取水口(5:55~6:15) - 柚葉沢(7:00~7:10)
- ほおじろ沢(9:10~9:30) - 木葉沢(13:10) - ビパーク地(13:30)

(鯉河 記)

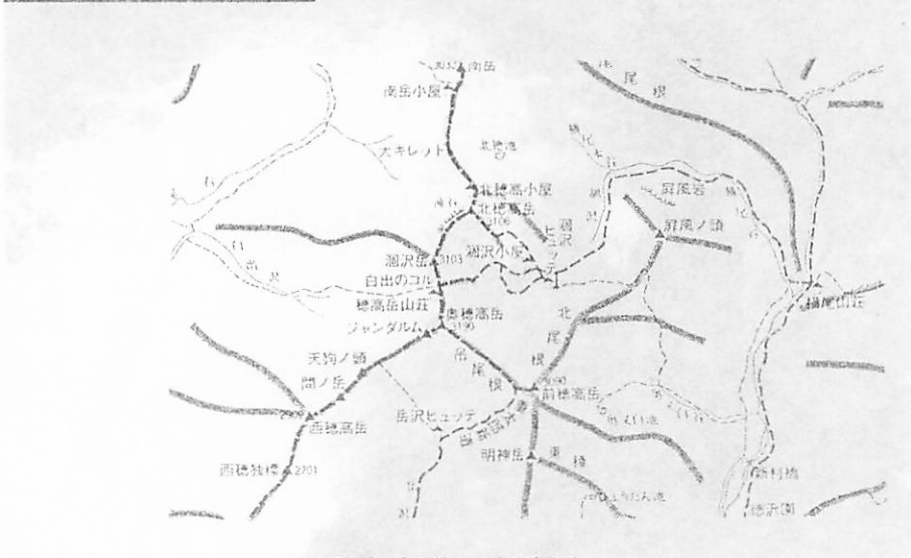


栗代川遡行



栗代川ピバーク

穗高夏合宿



穗高岳周辺 概念図



潤沢にて

夏合宿一穂高

91.8.10~14

パーティ L 高田暢年、佐藤文則

今年の夏合宿は、穂高へ。先発パーティの私と佐藤は二人で、8月9日、21時出発。前半は前穂周辺を登り、後半は後続パーティと合流し、滝谷を登る予定である。期待と不安を胸に抱きながら、涸沢を目指す。15時30分涸沢着

8月11日は雨のため停滞。明日に期待をかける。

8月12日、3時起床の予定が寝坊をして、4時30分起床。あわてて出発の準備をする。今日目指すルートは「前穂四峰正面壁北条新村ルート」今年は残雪が少ないとはいえ、奥又白本谷は軽アイゼンをはいて登る。

T1に8時40分着。人気ルートだけに先行が2~3パーティいた。取り付きテラスで順番待ちで少し時間を食うが、順調に登り北尾根14時30分着。ここで行動食を取り、北尾根を5、6の科尔まで下り、涸沢ベースへ戻る。16時30分。天気も今後安定しそうだし、まずは1本、順調なスタートである。

8月13日 3時起床。今日目指すルートは「前穂東壁右岩稜古川ルート」昨日同様5、6の科尔→奥又白本谷→C沢へ入る。C沢では残雪、浮き石に注意しながら登る。部分的に細かくいやらしい所もあるが、さすが東壁を代表するルートらしく、岩の弱点をついたすばらしいルートである。次に来る時は、ぜひともセカンドで来たいものである。北壁大テラス14時着。

今日は後続パーティが入山する日である。無線機を出す、反対側であるため入らず。この後北壁にて、私が右手に落石を受けけがをするというアクシデントにみまわれるが、順調に北壁～Aフェースを登り、15時25分前穂ピーク着。ここからは一般道を奥穂→涸沢へと急ぐ。涸沢で中島さんが心配しているのではと、なんとか日没までに着きたいと気があせる。19時涸沢着。中島さんと無事合流。私は落石で受けたけがをためらうため、涸沢にある「東大診療所」に行くと2ヶ所2針つつ縫われ、おまけに「ここは季節診療所なので保険がききません」と4千円も取られてしまった。その夜は傷口がズキズキと痛み、ほとんど眠れなかった。

8月14日 中島さん、佐藤は滝谷に入るため北穂南稜を登っていく。私はケガの為これ以上の行動は無理と涙を飲んで一人で下山となる。滝谷を一本も登れ

ないのは非常に残念だが、「また来年来ればいいや」と自分に言い聞かせながらも、下山しながらこれから入山する人とすれ違う時うらやましくなる。

結果的に2本しか登れなく又課題を残してしまったが、夏合宿全体で見れば全員無事下山をし、大成功であったと思う

(高田 記)

北穂高滝谷P2フランケ早大ルート ～ドーム西壁雲表ルート ～第一尾根ノーマルルート 継続登攀

91.8.14

パーティ L 生井一男、本図一統

8月13日 上高地から横尾を経て、湊沢に上る。そのまま北穂高南稜のテント場まで一気にいく。湊沢には、先登隊が居るので、中島さんはここに残り合流する。

私も久しぶりの山行だったのだから中島さんのように湊沢で泊まっていれば良かった。そうすれば、あの南稜の登りでの大バテ体験はなかっただろう。とにかく足は攣るしで、あんなにバテバテなのはなかった。(体力に自信がなくなった)

この大バテシーンをこともあろうか湊沢から中島さんが、双眼鏡で見ていたことが後でわかって言葉を無くした。

8月14日 昨日の疲れもとれて、やっぱりここまで上がってきて良かった。今日は予定通りに、P2フランケ早大ルートに行く。

アプローチは、B沢を下降しクラック尾根の取り付けからさらにバンドを右にたどると、P2フランケの基部に達する。グレードではA1の箇所があったみたいだが、アプミを使った記憶はない。クラック、フェースと難なくクリアし、苦労した所は無かった。正味1時間半で登攀終了。登攀終了後ドーム西壁雲表ルートの取り付けに向かう。

取り付けには先行パーティが居たので、少し時間待ちだ。後続パーティも来て、少し賑わいをみせる。後続はカメラでパチパチ先行パーティを撮ったりしていた。

気が付くと本図さんもモデルになってカメラでパチリ！していたようだった。先行は三人パーティなので時間がかかるかと思いきや難なく行ってしまう。後を追うように我々も取り付く。

まずはクラックを微妙にバランスを取りつつ、豪快に登る。クラックの上部は結構シビアなものがある。そこから草付きのバンドを左へ登り、右上する階段状の岩場を登ると、Aフェース中央部のテラスに出る。

ここから凹角を直上しカンテを微妙なバランスで回り込み、凹角に登る。この凹角の出口はハングしているが、一回アブミを掛ければ越せるが、フリーでも行けるようなのでトライするが、一步が取れなくて戸惑う。なんとなくフリーで行きたくてアブミに手がいかなかったが、仕方なくアブミを一発かけハングを越す何のことはない簡単に越せた。こんなとこで変なこだわりで時間をかけたのは失敗だった。ここを越すと、階段状になり簡単に終了点に着く。正味2時間半

一尾根には、またB沢を下ることになるが、その記録は本図さんに任せ、今回の山行記録はここで終わりにしたい。

(生井 記)

滝谷第一尾根

91.8.14

パーティ L 生井一男、本図一統

北穂小屋で水を補給した後、一尾根を登るべくB沢を下る。おそらく中島と佐藤はP2フランケに登っている頃だろう。トラバースしてクラック尾根取り付け点に出る。ここで「ナカジマー」と呼んでみると「本図さんですかあー」と返事が返ってきた。午前中は天気が良かったが、今はガスで何も見えないのである。

「んだよー。今何処に居るんだー」「ルートを間違えて、今何処にいるかわからないんですー。俺達のいる場所を教えて下さいー」「今、ガスっていて何も見えないからそこで待っているよー」「わかりましたー」という訳で、約一時間待ったがさっぱり晴れる様子がない。

「オーイ、日が暮れてしまうから俺達一尾根に取り付くぞー」「わかりました

一」と生井がCフェースに取り付くやいなや、一瞬ガスが晴れてきたではないか。生井に安定した所に居てもらい、中島の見える所まで移動する。見ると、あれあれあれ。とんでもない所にいるではないか。P1フランケの方だ。「オーイ、そこは登れないから降りてこーい」「降りるんだったら登った方が安全ですよー」「そんな事言たって、その上は被っていて悪そうだとー」などなど問答が繰り返し行われた後、どうするかは中島にまかせることにして、我々はCフェースの登攀を再開する。

Cフェースは左斜状バンドを2ピッチたどり、凹角を登る快適な登攀である。T3に出ると中島達がこちらに向かってトラバースしてくるのが見える。ここで少し待つ。合流、ボロボロの壁を登ってきたためだろう。落石と転落の恐怖と緊張から解放された中島はべたっと座り込んでしまった。まあまあよくこんな所を登ってきたもんだ。中島の話すところによれば、芝工大ルートに取り付いたが、ボロボロの壁に左の方にとんとん逃げたのだそうだ。自称、滝谷のガイドが何ということでしょうか。

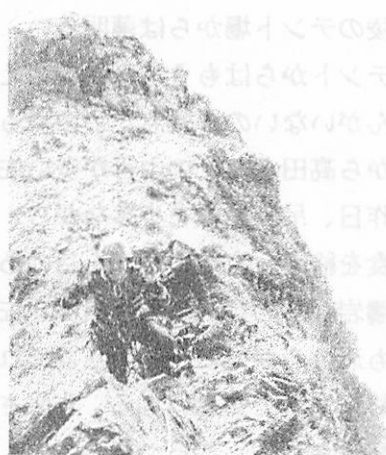
しょうがない、ここからは我々が頂上まで案内してやろう。と思いきや、いつもの如く、生井がとんでもない所をトラバースしてしまった。いつ崩れるかわからない岩をつかんで左にトラバースするのだが、足元はスパッと切れ落ちて冷や汗ものだった。生井とザイルを組むと4級のルートは5級、5級のルートは6級といつも一ランク上の登攀を強いられてしまう。ルートファインディングが悪くて、岩登りがじょうずときているから始末が悪い。後からついていく者は大変である。困ったもんだ。でも生井のトップは信頼できることも事実なのである。Bフェース、Aフェースと無事登り終えて北穂の頂上に立った時は日没寸前だった。人の多いのがちょっと気になるが、ブロッケンも見え気分は最高だ。一日一善。今日も良い事をしてしまった。仲間を二人も助けてやったのだ。ビールでもおごってくれるだろうな。さあ早くテントに帰って一杯やろう。

結果を報告します。中島は全くおごってくれる様子もなく、さっさと涸沢に下って行ってしまったのです。中島は感謝の気持ちというものを持っていないらしい。俺はいつも会員の人々に言っているではないか。感謝の気持ちがあるなら、それを形に表せと・・・←ジョウダン

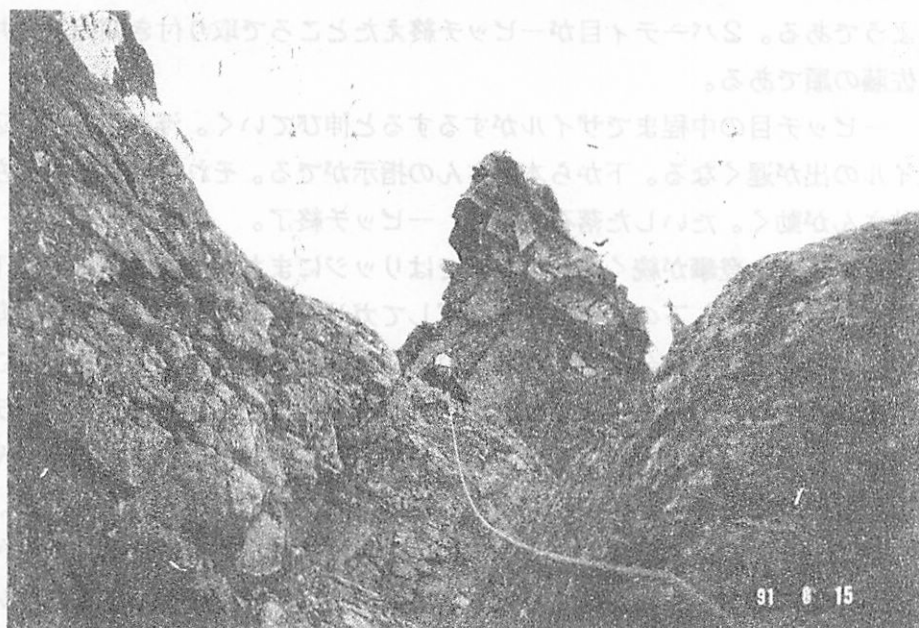
(本図 記)



P2フランケ



第一尾根



第四尾根

91 8 15

(58 編次)

北穂高滝谷第四尾根

91.8.15

パーティ L 生井一男、佐藤文則、本図一統

南稜のテント場からは薄明るい、赤と黒との世界が開けている。午前4時。所々のテントからはもう話声が聴こえてくる。手早くそうすいを作り、すする。高田さんがいないのが残念だ。いつもの何でも来いというような笑い顔がない。入会時から高田さんとの山行が多い佐藤にはちょっと物足りない朝である。

一昨日、吊り尾根を歩きながら、山から下りたいとまで考えた佐藤も今こうして朝食を終え、自然の息吹を目のあたりにすると山にいて良かったと思う。

松溝岩からのC沢の下降では、佐藤が相変わらず遅い。急な下りになるとどうしても恐怖心が先に出るのだ。それでもなんとか長い下りを終え、小コルへの急登を終えた所で一息入れる。本図さんから、ようかん、豆菓子、吉原殿中の行動食を配給される。ごつつあんです。

先行パーティが一ピッチ目の途中で落石を起こしている。浮き石がかなりあるようである。2パーティ目が一ピッチ終えたところで取り付き開始。生井、本図、佐藤の順である。

一ピッチ目の中程までザイルがするすると伸びていく。浮き石の多い辺りでザイルの出が遅くなる。下から本図さんの指示がでる。それに応じて右へ左へと生井さんが動く。たいした落石もなく、一ピッチ終了。

以後快適な登攀が続く。Bカンテではリッジにまたがり、左右の沢を下に見ながら進む。ツルム下のピナクルをめざしてガリーを行く。ここは脆い。落石がポツポツとあるし、自分でもおこし易い。注意進行でピナクルに到達。ここから向きをかえてツルムを途中まで登り、懸垂下降でいったん降りて、Dカンテに取り付く。、Dカンテ、IV級とV級だ。本日のハイライト。これまでよりやや急なカンテ、それでもDカンテの一ピッチ目はクラック（チムニー）を利用し、クリアー。二ピッチ目かぶり気味のカンテに体を外に放り出すようにして取り付け（とにかく最初の3～4mが恐かった）、カンテ上に乗れば確保してくれている生井さんが見え、その後ろに回収している本図さん、上には縦走路を行く人々。、こうして佐藤の滝谷第2日目は終わった。

（佐藤 記）

槍ヶ岳回想

91. 8. 19~22

パーティ L 鈴木操、笹沢ひろみ

八月の上高地は早朝から賑やかである。多くの観光客やハイカー、そしてアルピニストがバスから吐き出される。今年五月の春山では悪天候の為に濁沢止まりの下山。今回こそはと期待している。河童橋の近くで穂高連峰を見ながら朝食を取るが、台風の近ずいているてんが気になってしまう。同行者はSさんである。予定は槍沢から山頂を往復、又は槍平へ下る一般コースなので、彼女にも十分対応できるはずだ。

横尾まで曇空の中を快適に飛ばす。小屋泊まりのスタイルは足が速い。槍沢ロッジにつく頃には雨が降りだし、雨具を着ての歩行が不快である。予定では(往復の場合)余裕を持って一泊するわけが、時間も早いので昼食の後に小雨の中を出発する。樹林の中を草花に目を落としアブローチを楽しむ。数カ月前までは山(本格的な)を知らなかったSさんの一步一步は確実に進歩しているし、体力もある。一人前の山女に近ずいたのか? いささか感慨を持って眺める。

しばらくすると視界が開け、谷沿いに沢音を聞きながら左岸を登るが、上部には雪渓が見られずガスが湧いている。時折、下山する人に様子を聞けば、今年は雪が少ないとの事で安心するやらガッカリである。不安定な天候は冷気を増し、

八月とは思われないほどで、立ち止まると寒く、遅くなりがちなSさんにハッパをかける。後続のパーティが二人を抜き、前後に人影が見られないほどに遅れている。明らかに天候は悪化している。せめて殺生ヒュッテまで持ちこたえてくれれば…。ツェルトはない。何が何でも小屋へ入らねば、急激に変化するこの風雨では最悪の事態が予想される。二人とも体調がよいのは救いである。



岩陰でテルモスの紅茶で一息入れ、今日の日没は六時、これから風雨が強くなる事をSさんに伝える。坊主の岩小屋からはガレの急な登りがあり、標高も高い。下降が全くない槍沢上部は、彼女にとって苦しいアルバイトであろう。高度障害も原因の一つか、目に疲労が表れ足に力が入ってない。ガスは密度を増し、20m先が見えない。ヒュッテへのルートが判らず通り過ぎてしまった今は、何としても山荘まで歩き通さねば危険である。風雨が以前にも増し、時計は17時をまわり、ジグザクの登山道に雨水が川のように流れ始めてきた。靴の中と全身が濡れ、落石の心配もあり、立ち止まる事は危険だ。天は我々に試練を与えているのか・・・「Sちゃん一気に小屋まで頑張ろう！」浅くうなずく彼女に風で振られる自分にもカツを入れる。夕闇で暗い尾根に乳白色のガスは不安を増し、二人を焦らせる。人の声で位置を確認し、斜面の白ペンキを頼りに登るが、足がすべり気が焦ってしまう。赤い屋根が見え明かりの見える玄関先で彼女を待つ。

スプヌレの二人が寒さにふるえながら入ると、周囲の視線が注がれる。急いで宿泊の手続きをとり、温かい缶コーヒーを片手に乾燥室へころげ込み、着替えると共に靴をストーブの近くへ下げる。室内は古着屋の様子、釘やロープに空気がない。一息ついて「Sちゃんやバカッたネッ」「アラそうなの？」人の気も知らずにコノオーッ！二人が冷えた夕食が終わる頃、風雨は小屋をも揺るがす程に増していた。小屋の中は満杯で、早くも寝入っている人も居た。悪天候にもかかわらずでアル。

目が覚めると早くも出発の用意で玄関は賑やかで、外は風も治まりガスも切れ、眼下に雲海が広がる。すぐ近くに槍の穂先が天空をツキ上げている。「ウワァー、スッゴオイ」人間がアリみたいッ。昨日の疲れがいつべんに飛んだ様に目が光る。黒々とした岩峰に首が痛くなる。

”極楽の花の台か槍ヶ嶽、昇りて見れば見えぬ里無し” 播隆

空身でクサリを頼りに穂先に登る。三千百七十九メートル空中に放り出された様である。四方をナタで切り落とした岩のオブジェ、三百六十度のパノラマが眼前に広がる！青い空に雲海、そして岩稜のコントラストが彼女を満足させている。「山ってスゴイのねえー」遠くの空が今日の天気を約束してくれている。

朝食の後、槍平へ下るコースをとる。お花畑に誘惑されたからである。ガレた山肌を下り、西鎌尾根を右に見る頃は背に太陽を受け、振り返ると大喰岳はマブシク槍の穂先は小さくなってしまった。急ぐ事はない。しばし寝そべって花々に身をゆだねる。静かで時間の観念がなくなる。青い空に色とりどりの花々、昔の

人々はこんな場所にこの世の浄土を感じとったのだろうか？ 中年のグループも長時間の休憩を楽しんでいる。

槍平小屋まで樹林帯を右俣に沿って下るのだが、私にはアキるコースで気をまぎらわすために、昨日の出来事などを反省する。単調な下りである。小屋で余分な食糧を食べるがマダ余る。下山路には冷たい沢水があり、度々水を飲む。安定した天気は白出沢までで、林道を歩く頃には小雨になった。余りゆっくりしたせいか、前後には人影もなく足音が谷間に響く。工事用の車かエンジンの音が聞こえ出す。現世への回帰である。

8月20日

上高地（6:00）－横尾（9:00～9:30）－槍沢ロッジ（11:00～11:30）

天狗の池分岐（14:50）－槍ヶ岳山荘（17:30）

8月21日

出発（8:30）－槍平小屋（11:30～11:45）－新穂高（17:30）

（鈴木 記）



南アルプス南部回遊記

91.8.23~31

パーティ 川上浩史(単独)

8月23日 井川～畑薙第一ダム

大井川鉄道井川駅のバス停でバスを待っていると、小雨がバラつき始めた。今回の山行は、雨の中から始まったのである。

本来ならば登山バスがダムまで入るのだが、20日で終了しており、タクシーを使うか歩くしかない。タクシーでは18000円かかるので、貧乏学生の単独行は歩くのみである。

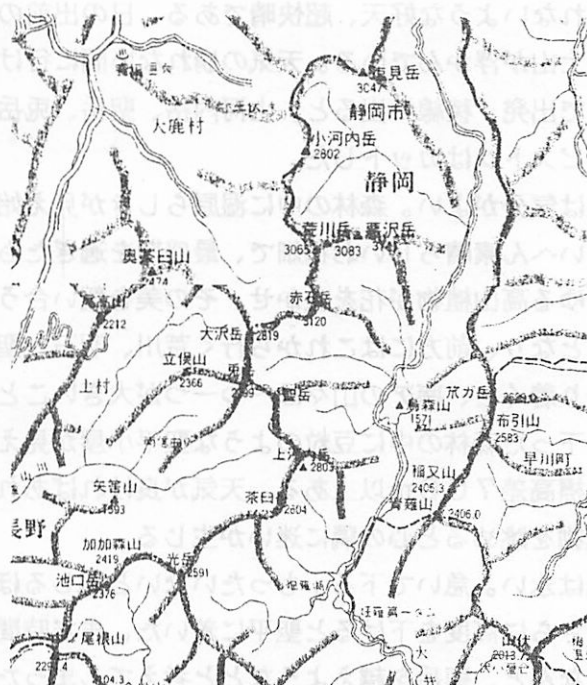
路線バスは部落のさいはての地、八木尾又に着くと、転回して帰って行った。さあ、林道歩きの始まりである。畑薙第一ダムまで16km。ただひたすら車道を歩く。時折、工事車両が前から後ろからきて通り過ぎる。ただそれだけである。どのくらい歩いたのだろうか、遙か彼方にダムが見え始めた。おお、あれこそ最初の日幕場だ。ガスと小雨の中、辺りが薄暗くなった頃、ダムの売店に到着。ベンチを片づけ、テントを張って寝た。

8月24日 畑薙～ウソッコ沢小屋

朝起きると、見事なまでに一面のガスである。稜線に出るまで展望がないことを知っていたので、何の期待も希望もなく、トボトボと歩き始める。1時間歩いて、畑薙大吊橋、今回の登山口である。ここに至るまで、なんと長かったことか。

霧の中、吊り橋を一人で渡る。対岸はようやく登山道である。急登を登りつめ、ヤレヤレ峠を越えて少し下ると上河内沢に出合う。この辺で雨が降り始めた。中途半端な雨で雨具を着ず、Tシャツと短パンで歩く。ウソッコ沢小屋に着くと、ずぶ濡れになっていた。休憩しているうちに雨は次第に強くなった。昼頃まで様子を窺っていたが、雨の勢いは衰える気配がないため、この小屋で泊まることになった。解放になっているので無料である。

この日は土曜日ということもあって、この小屋には多くの登山者がいた。夜には天気も回復に向かい、どうにか雨だけはやんだ。



南アルプス南部 概念図

8月25日 ウソッコ沢小屋～茶臼小屋

朝、薄いガスがかかっていたが行動できないわけでもなく、歩き出す。吊り橋を2カ所渡ると急登が始まる。急ぐ旅でもなく、のんびりと歩いていると、時々ガスの薄い所から日が射して影ができる。ところが決してそれ以上に天気が良くならないのだ。歩くとあつい、暑い、熱い。泊まると、空を飛んで人の血を吸いにくる図々しい奴らが集まってくる。

中間地点の横窪沢小屋は、高校総体のため新築され、二階建ての立派な姿を見せていたが、閉鎖されており、旧小屋しか中に入れない。おまけに給水タンクが片付けられていて、水道の蛇口を捻っても水が出ない。特に水の補給が必要でもなかったのに、無視して出発。茶臼までひたすら登る。登りが緩くなると、前方にガスの中から小屋が見えてきた。整備された立派なテニ場があった。

夕方、次第にガスが晴れ、星空になった。次の日以降に期待して眠りについた。

8月26日 茶臼小屋～聖岳頂上直下

朝、信じられないような好天、超快晴である。日の出前のだいたい色に染まった東の空に富士山が浮かんでいる。天気の良い間にいけるところまで行こうと思い、急いで出発。稜線に出ると、上河内岳、聖岳、兎岳が見える。時間勝負なので茶臼岳ピストンはカットした。

早朝の稜線は気分がよい。森林の中に湿原らしきが見え始めた。亀甲浄土である。ここはたいへん素晴らしいお花畑で、最盛期を過ぎたものの、赤、代々、黄、紫、白、あらゆる高山植物が花を咲かせ、その美を競い合う。森林限界を抜けるとハイマツ帯となり、前方にはこれから行く荒川、明石、聖が大きく聳えている。上河内岳に登り着くと、南アの山々は一つ一つが大きいことを改めて感じさせられた。うんと下った森林の中に豆粒のような聖平小屋が見える。聖岳頂上まで眼下の小屋から標高差700m以上ある。天気が良ければあれを越えてしまおうと思っても、現物を眺めると心の隅に迷いが生じる。

とにかく先は永い。急いで下る。もったいないと感じるほど下ってしまい、樹林帯に入ってからさらに高度を下げると聖平に着いた。まだ時間も早く天気も良いので欲が出て、なんと、聖岳を越えようなどと考えてしまったのだ。水を補給して出発。登る、上る、昇る。この登りはすごい。再び森林限界を抜け、山頂を見上げるが、自分の位置はまだずいぶん下だ。天上に続く一本の線の上を歩いているうちに、急に頂上がガスに巻かれた。しばらく登ると標高2800mの天幕整地に着いた。ここは1～2人用テント一帳分だけの整地がされており、水も湧いている。ここで休憩していると、ガスが降りてきて周りは何も見えなくなった。昼を過ぎてもガスは晴れず、今更聖平まで戻るなんてアホらしくて考えられない。ということでテントを張った。

夕方、辺りが薄暗くなってきた頃、雲海のできる様子を観察することができた。やはり高い位置の天場はいいな。ただし、日が暮れると気温が急に下がっていた。それにしても、夜の7時を過ぎて聖岳から下るパーティが2つもあったのには驚いた。



8月27日 聖岳頂上直下～百間洞露营地

朝、頂上で日の出を拝む自分を想像しながらフライを開けると、一面のガスである。食事の支度をしていると、大雨になってしまい停滞まで覚悟した。ところが待つこと数時間、雨が止み、ガスの切れ目から青空が見え始めたので大急ぎで撤収して歩き始めた。念願の聖岳頂上に立つ！雲の上に出たので青空なのだが、周りの山々は雲にかくれて見えない。晴れているのにほとんど展望がないのだ。まあ良いや。重い思いをして担ぎ上げた缶詰めを開ける。これがなんと、みつめ缶であり、コンデンスミルクをかけてクリームみつめにする。日本最南の3000m峰、青空の下で最深の高峰の絶頂で一人で口にするクリームみつめは非常に美味しい！！奥聖岳が見えているが、赤石岳が晴れないと行ってもつまらないのでピストンはしない。

下り始めると、赤石岳が雲の切れ目からときどき姿を見せてくれる。下りの道は左側が崖になっており、一ヶ所きわどい部分を通る。ここはロープが張ってあったが超不安定で、落っこちた時以外は持っているとかえって危ないくらいだった。

兎岳頂上直下の兎岳避難小屋は、使用のマナーが悪く、落書きをしたりゴミを散らかしたりして、大変不愉快だった。この辺から天気はさらに良くなり、ハイマツの稜線を歩いて見えるもの全て見えている感じで最高の気分だった。しかも周りには人影がない。

中盛丸山からの下りはつまらないガレの道で、ガンガン下っていくと倒壊した百間洞山の家があった。山奥深いため、倒壊から二年経っても新築どころか撤去さえされず、放置になっていた。ここからは赤石沢を最上流へと詰めていく。露营地には、自分を含めてテントが4張りあった。

8月28日 百間洞露营地～荒川小屋

百間洞露营地から登ること1時間、百間平に入る（あるコースガイドでは20分の登りとあったが、このタイムは厳しすぎる。20分で登れるわけがない）ここは広い広いハイマツの尾根で、高原とか野原という感じの展望の開けた気分の良い場所だ。遠く北部の仙丈岳が見え始め、ずいぶん歩いたと思う。

赤石岳に登り着くと、それはもう気分最高。南アルプス南部の盟主から見下ろす眺めは、期待を満足させるのに充分すぎるほど素晴らしいものだった。遠く越えてきた聖岳や上河内岳が見える。これから行く荒川三山、さらに北部の塩見岳、

仙丈岳、白峰方面が遠望できる。さて、天気がよいのでこの日のうちに悪沢岳をピストンすることにして、さっさと頂上から立ち去る。これから登る荒川三山が大きい。

荒川小屋に着いたらまず荷物を置き、弁当を食べる。必要最小限の軽装に変身して、即座に出発だ。登りはカール状の地形になっていて、辺り一面のお花畑だ。スケールもでかく、人も少ない山域なので荒らされていない。荒川中岳から眺める悪沢岳は格好の良い均整のとれた三角形で、登高意欲をそそる。登り着いた頂上からの眺めは、これまた素晴らしく、赤石岳の写真を5枚も撮ってしまった。この山は南アルプスの中ほどにあるので、南部、北部とも良く見える。今回の山行の最高峰である。ここでもみつめ缶を開けた。三年前を思い出す。小雨の中を縦走し、荒川・赤石・聖の全部から見放され、頂上標識の写真しか撮れなかったなあ。しかし今回は素晴らしい。南ア南部単独縦走の最後を飾るのにふさわしい天気と展望を神様は与えて下さった。

さて下山を始めると山の神様が機嫌を損ね、天気が下り坂。荒川小屋に戻っていたときには雨になっていた。この雨は次第に強くなり、夜には大荒れになってしまった。小屋の中でただ一人、せっかくのテントを枕にして寝ることになったのだ。

8月29日 荒川小屋雨天停滞

前日からの雨は衰えることを知らず、降り続けている。エスケープルートの小渋川の道は雨の時や直後は通行不能であり、この雨の中を勇ましくばく進したところで高山裏止まりになることは火を見るより明らかなだ。ということで、停滞を決意した。これで、2日遅れてしまった。

8月30日 荒川小屋～三伏峠小屋

小屋を出た瞬間は星空だったが、夜が白み始め明るくなるにつれて天気は崩れていく。荒川前岳の頂上でガスが一段と濃くなって、目の前にある頂上標識がボヤけて見える。ここが今回の山行での最後の3000m峰で、あとは下山まで高度を落とすだけだ。

降りる。長大なガレ場をひたすら降り続け、森林帯に入り高山裏露营地に着く。ここらへん一帯は虫が異常に多いことを知っているのだから、休憩をとらずに歩き続ける。ゆっくりでも動いていると、吸血鬼は寄ってくるが攻撃はしてこない。と

ころが、気体分子のように均一に分布しているブヨなどの小さな虫が、息を吸うと鼻に口に、ひどいときには気管にまで入ってしまい、不愉快このうえない。やはりこの辺は秋に來ないと駄目だなあ。おまけに道は草藪の中につけられており、アザミが一面に生えている。短パン姿でスネ毛むき出しで歩いていたため、ささる、すれる、ひっかかる！

大変な思いをして小河内岳に來ると、そこはもうハイマツ帯で気分が良い。遠く三伏峠が見え始め、この山行も終わりに近づいたことを感じさせられた。

三伏峠の小屋に着き、テントを張ると台風の接近による雨が降り始めた。この夜は、豪雨降りしきる中、やかましく鳴り響くフライの下で眠ることになったのだ。

8月31日 三伏峠小屋～鹿塩

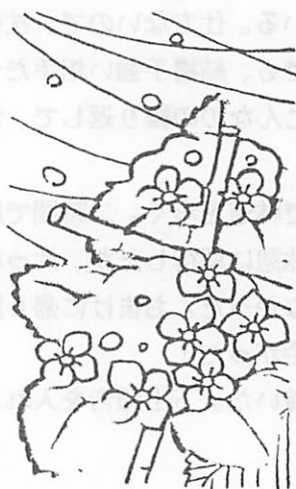
朝、台風状況をラジオで聞きながら準備をする。この台風12号は浜松に上陸して北東に進んだため、ほぼ直撃を受けた様子である。進路、速度、規模からみて、午後には雨が上がると思われた。そこで出発をうんと遅らせ、下山を開始した。撤収時にはずいぶんきつかった雨も尾根を下るにつれて弱まり、塩川に出合う頃には霧雨程度になっていた。ところが、この塩川が大増水しており、上流から転がってきた丸太がそこらへんに引っかかっている。渡渉点にあるような、丸太を束ねた簡単な橋はことごとく破壊され、固定用の針金だけがちぎれて残っており、対岸にペンキと踏み跡がついている。仕方ないので、杖になる木の棒を拾って渡渉を始める。ひざくらいの水深でも、結構手強い相手だった。少し進むと棧道が落ちていたので高巻きをする。こんなの繰り返して、危なかったが面白かった。

塩川小屋に着いたが、バスはないので林道を歩く。二時間で鹿の湯に着いた。ここには温泉旅館が三軒あり、入浴と休憩に期待したが、片っ端から門前払いをくらい、公衆電話すら使わせてもらえなかった。おまけに帰り際に、僕が立っていた所にホースで水を撒き、掃除をしやがった！

最大級に気分を害し、鹿塩バス停に着いた。下山報告を入れ、帰路に着く。辰野で銭湯に入って夜行列車で帰った。

- 8月23日(金) 八木尾又バス停(12:00) - 畑薙第一ダム(17:00)
- 8月24日(土) 出発(5:20) - ウソッコ沢小屋(8:20)
- 8月25日(日) 出発(6:25) - 横窪沢小屋(8:00~8:20) -
茶臼小屋(11:20)
- 8月26日(月) 出発(4:40) - 上河内岳(6:20~6:30) -
聖平(7:50~8:20) - 天幕整地2800m(10:30)
- 8月27日(火) 出発(8:10) - 聖岳(8:45~9:35) - 兎岳(11:10~11:20)
中盛丸山(12:50~13:00) - 百間洞(14:10)
- 8月28日(水) 出発(5:20) - 百間平(6:10~6:20) -
赤石岳(8:10~8:35) - 荒川小屋(10:20~11:10) -
悪沢岳(13:10~13:50) - 荒川小屋(15:20)
- 8月29日(木) 雨天停滞
- 8月30日(金) 出発(4:30) - 小河内岳(10:40~10:55) -
三伏峠(12:40)
- 8月31日(土) 出発(7:45) - 塩川小屋(9:40) - 鹿塩バス停(12:00)

(川上 記)



笛吹川東沢東のナメ沢

91.8.25

パーティ L 本図一統、佐藤文則

朝いつものように車の中で目を覚ますと外はくもりだった。北岳にいる高田・原田パーティはどうしているのだろうか。こちらコンビニおにぎりの朝飯をすませ、出発。林道を少し行くと小雨が降ってきた。うーん。どうするのだろう。本図さんはどんどん行く。僕もついて行くしかない。

すぐに着くのかと思っていたらとんでもない。かなり長いアプローチでやっとホラノ貝沢、そこから又しばらく歩いてやっと東ノナメの大滝。たしかに大きい。登攀具をつける。さて登る。登るのはいいが、どうやって登ろう？ルート図にはベタベタ歩けるとあるが、全然と言っていいくらい駄目だ。すべるすべる。ヌルヌルの大滑り。本図さんも滑ってる。5~6m登って後はあきらめて左岸の草付きを登る。それでも時々滝に出て、きわどいフリクションの登りを楽しむ。僕は2ndだから楽しいが、トップの本図さんはおつかねえだろうなあーと思いながら上をめざす。四段目だけはどうかしら正規ルートではないらしいルートを登り、計300mの大滝を終了。

これを越えてしまうと後は小さなもので、淡々と登っていく。後でわかったのだが、本図さんは長いアプローチで相当足が痛くなったらしく、本当に淡々と登る。時々無線を出す、高田・原田パーティとはつながらない。ここは沢の中だし、無理かといいいながら上へつめると、程なく終了。

かなりの急登をやぶの中を泳ぐようにして登山道。ここが迷いやすいという鶏冠尾根。本図さんがとっても楽しそうにしている。一方、僕はすでに恐くなってルート図を何回も読み直す。さて出発。とりあえずハーネスをつけ、ピナ、シュリングを少々持って下降開始。でも道はしっかりしている。目印もよくわかる。途中見晴らしのよい尾根のような岩の上で記念撮影をして、さらに下降すると、迷う原因という倒木に出くわす。が、これすでに切って道がついてあり、迷わず通過。そのまま下まで降りきって、今回も無事に帰ってきました。沢で靴をはきかえ、横道を少しだらだらと下って、駐車場のそばで風呂に入って、さっぱり。北岳組はどうしたかと思いながら帰路につく。

(佐藤 記)

南ア、北岳バットレス中央稜

91.8.24~25

パーティ L 高田暢年、原田真由美

20才の時初めて北岳バットレスを下から見上げた時、「すごーなあ、こんな所登る人がいるのかなあ」それから9年後の昨年北岳バットレス”四尾根””dガリー奥壁”を登り、そして今年”中央稜”を登った。中央稜は、ピッチ数はすくなくものの、北岳頂上直下につきあげ、なかなかカッコイイルートである。

初日は肩の小屋へ移動するだけである為、ゆっくりであった。天気はくもりで非常に湿気が多く、空気が重く感じた。風もないため非常に汗をかく。おまけにおなかの調子も悪く、やたらとおならが出る。自分でも「くせーなあ」と思いながら樹林帯を登る。原田さんは少し遅れているため、臭わないらしい。何発目のおならか忘れたが、またもよおしてきた。原田さんは遅れているし、他の後続者もいなかったので遠慮なくすかす。数秒後、強烈な臭いが私を襲う。「こりゃあすごーや」とい自分でも感心していると、上から若い男4人組が下ってきた。狭い樹林帯のルートであるため、上の4人組は立ち止まり道をあけてくれた。私は「彼らに気付かれなきゃいいけどなあ」と思いながら彼らとすれ違う。すると先頭の一人が「おい、なんかすごー臭いがしねえか？」すると二人目が「本当だ、なんか排泄物のようなおいがするぞー」すると又一人目が「みんな、この辺にキジ場があるみたいだから、気をつけろよー」私はヒヤヒヤしながら逃げるように登った。この日はこの話で盛り上がり、酒をたらふく飲んだ。

8月25日 4時起床。前夜酒の飲み過ぎで頭がいたい。ガスの中頂上を目指す。中央稜の取り付けは頂上より少し下った所より、踏み跡を四尾根上部に下り、枯れ木のテラスより懸垂下降1Pで取り付けへ着く。8時

このころより時々ガスがきれ始め、下にマッチ箱のコルが見える。中央稜は部分的にAOで登り、少し緊張する所があったが、高度感も充分あり、ピッチは短い、内容的には充実したルートであった。

今回のように、終了点から下降してルートに取り付く登り方は初めてであるが、このような山行もなかなかのんびりでいいものだ。

これで北岳バットレスは卒業だなと10年来の目的が達成された満足感で下山した。

(高田 記)



北岳バットレス登攀後、頂上にて

屏風岩—東稜

91.9.14~17

パーティ L 高田暢年、原田真由美

今年のGW合宿で屏風岩を狙ったが、悪天及び時間切れで敗退に終わった。取り付きまで行って見上げた屏風岩は、威圧感があり素晴らしいものであった。「今年中に必ずここを登ってみたい」と思っていたところ、原田さんが秋に連休が取れそうだと言う。私も彼女の連休に合わせ有給休暇を取り、再度屏風岩にチャレンジすることになった。

9月13日 台風が接近しており、あまり天気はよくないが、天気の回復を期待し出発。3時30分、沢渡の駐車場着。夏は車の止める場所がほとんどないくらい混雑していた駐車場が悪天のせい、数台しか止まっていない。

9時14日 天気、雨。雨は昨夜より増して強くなっている。聞くところによれば、上高地行きのバスはこの雨だと止まるのは時間の問題だと言うではないか。あわてて準備をしてバスに乗り込む。乗客も我々の他に5~6人しかいなかった。この日は横尾までである為、のんびりカサをさして歩く。

9月15日 4時30分起床。天気予報の通り天気は小雨。行って行けないことはない天気であったが、快適な登攀は望めそうもない。明日の天気に望みを託し、本日は停滞とする。屋前に雨は上がったので、蝶ヶ岳まで登ってきて、檜ヶ

岳をバックに写真を撮ってきた。

9月16日 3時起床。昨夜雨が降っていたので心配していた天気も何とか持ち直している。早々に朝食をすませ、4時20分出発。まだ暗い中ヘッドランプをつけ、何度か通いなれた道を歩く。横尾の岩小屋の所あたりで明るくなり始めた。ここからールンゼ押し出しまでの徒渉は水量が多く、石づたいに行けそうもなく、かといって靴を脱いで徒渉すると足が滑りそうなので、靴のまま徒渉を行う。ここよりT4尾根取り付きまではールンゼの踏み跡を登っていく。取り付き着6時。

ここで登攀具をつけ、いよいよ登攀開始となる。T4尾根はアプローチといわれているが、なかなか緊張するピッチがある。

東稜取り付き8時。ここより人工主体の東稜の登攀が始まる。全体的に垂直または前傾ぎみの壁であることと、このルートは下降にも使われており、ピンもよく効いており、割と安心して登れた。しかし思ったより時間がかかり、当初2時前には登攀終了の予定であったが、実際は3時30分であった。ここでこのまま下降するか、上へ行くか時間的に迷う処である。原田さんは「ここを下降しようよー」と言うが、暗くなるまでに最低コルまで行けば、後はヘッドランプをつければ一般道を横尾まで下れるし、折角ここまで苦勞して登ったのに、頂上まで行かないのももったいない気がしたので、上へいくことにする。踏み跡をひたすら登り、屏風の頭着17時30分。薄暗い中溜沢をバックに記念写真を撮る。溜沢の灯が夏に比べると寂しく光っていた。

最低コルからはヘッドランプの光を頼りにひたすら横尾BCをめざす。一般道に出たときは本当に嬉しかった。おおげさなようだが、「助かった。生きて帰ってこれた」と思ったのが本音である。横尾テント着21時20分。小屋はすでにしまっており、ビールが買えなかったので焼酎の水割りで乾杯をし、完登祝いをした。どうせ明日は帰るだけであるからとことん飲もうと思ったが、疲労がピークに達しており、体があまりアルコールを受け付けない。しかし登ったという満足感も加わり、心地よい虚脱感を味わう。日常の仕事の疲労では得られない気分である。

今ふり返ってみても、苦勞はしたがその分充実した、恐らく今年一番の登攀になるものと思われる。ぜひとも来年は屏風岩東壁雲稜ルートを登ってみたいものである。

(高田 記)

清津川釜川右俣廻行

91.9.16

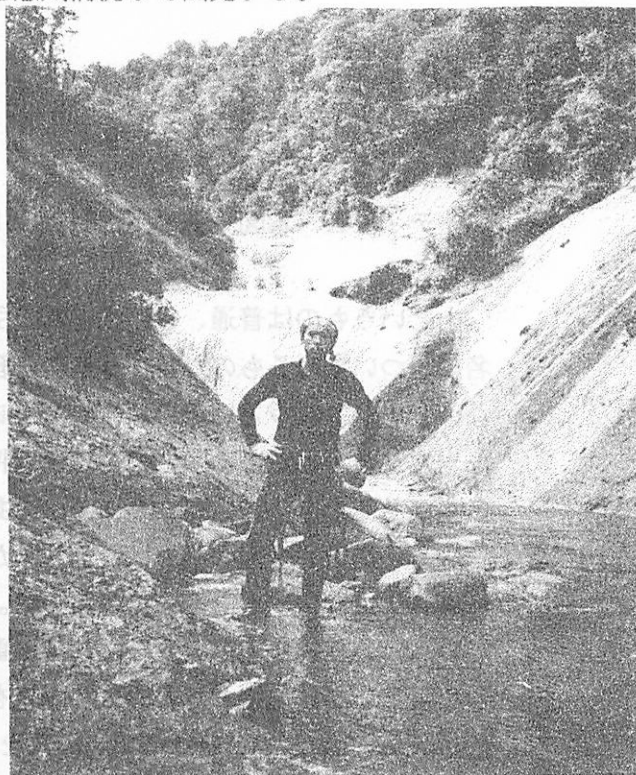
パーティ L 本図一統、佐藤文則

金のない我々は関越トンネルだけを高速道利用で、あとは一般道で行く。石打から十二峠をトンネルで越したら雨になってしまった。大場部落までの道がわからず、タクシーに聞くがそれでもわからず迷いながら何とか着いた。寝る前にアプローチとなる林道の入り口を確認しておこうとするが、これも又発見できず仮眠をとる。雨も本降りになってしまった。

しかし、目が醒めると雨がやんでいる。何か天気が良くなりそうだ。林道入り口を発見。さあて出発だ。「本図さん、俺、溪流タビ忘れてきちゃった」ガクーン。ずっとこけてしまった。佐藤のバカタレ、アホ、トンマ、おめえは何てドジなんだ。てめえみたいな奴はくたばってしまえ……。と言いたかったがやめた。「行けるところまで行ってみっか」と意気消沈して出発する。

ルート図によると右を巻いたり左を巻いたりしているが、そんな必要もなく、なるべく水流近くを進む。佐藤は運動靴なので、つるつる滑るらしく少しスピードが遅いが、それでも何とか登ってくる。釜を持った8m滝は左の凹角に登る。取り付きのホールドは乏しいためバランスを要求されると文献にはあるが、何ということとはなかった。

20m漕を泳ぎ、ゴルジュの楽しい廻行が続く。すると、一瞬にしてパッと目の前が開け、素晴らしい景観が目の中に飛び込んできた。三ツ釜の出現である。丁度すり鉢の底にいる様だ。正面からは



三ツ釜

何段にも滝が落ちて、何か別世界にいるような錯覚をおこす。これだ！！これが
見たくて釜川に来たんだ。やはり来て良かった。ここまで来られたのも相棒がよ
く頑張ったからだ。佐藤のバカ、トンマ、ドジは取り消すことにしよう。天気も
良くなり気分も最高、昼寝でもしたいところだが、なにせ相棒が運動靴だから、
この先の悪場でどれほどの時間がかかるかわからないので、小休止の後出発する。

直登、へつり、泳ぎでどんどん行く。清水沢出合下の15m滝も右岸から小さ
く巻く。もう三ノ沢橋まで悪場はないはずなので竿を出すさっぱり釣れない。
橋に荷物を置いて、さらに上流に行ってみるが釣れなかった。帰りは長い長い林
道を小松原湿原で道草を食いながら車まで戻りました。

車止め(6:20) - 取水口(7:35) - 二股(8:15) - 三ツ釜(10:20) -
清水沢出合(11:20) - 三の沢橋(12:50~13:40) - 車止め(16:45)

(本図 記)

御前ヶ遊窟

91.9.22~23

パーティ L 本図一統、高田暢年、川上浩史、鈴木操、佐藤文則、笹沢ひろみ

山というものは普通、〇〇山、△〇岳、□△の頭、□□丸、△△峰などという
名前がついているものだが、御前ヶ遊窟と聞いても何のことだかさっぱりわから
ないと思う。ユウというのは岩穴の意味で、この辺の山にはユウという名のつい
た岩穴がたくさんある。この山は余五將軍平維茂の夫人が隠れ住んだといわれる
伝説がある大きな岩穴が二つある山である。

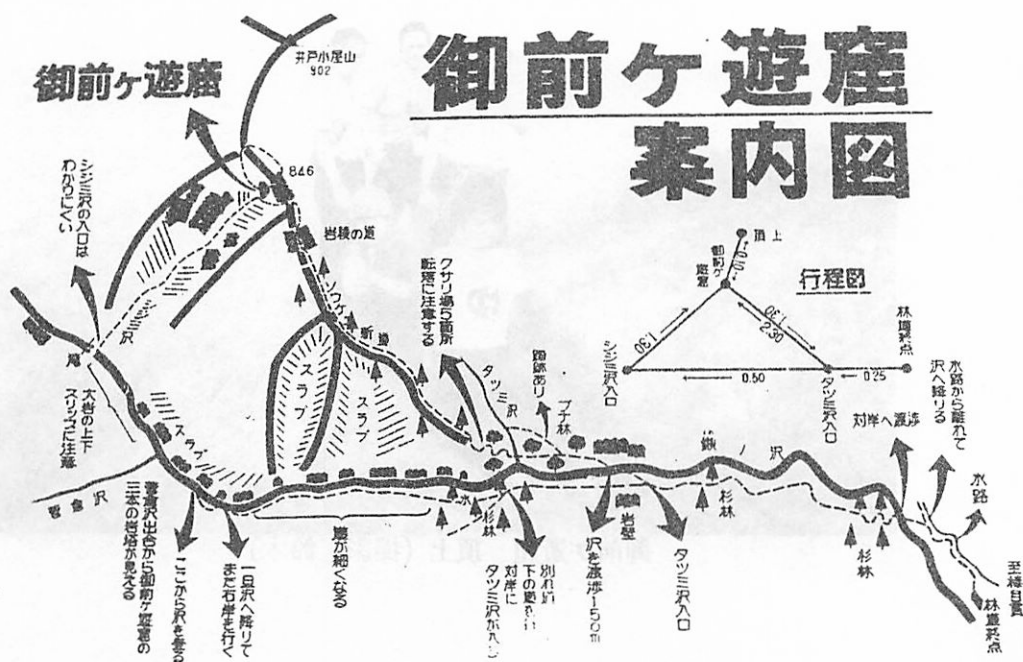
9月22日 今回の山行は笹沢さんがテントで寝るのは初めてだということでキ
ャンプファイアーも計画しているのだ。幕営予定地までは、歩いて20分位なの
でいろいろな物まで持ったため、荷が重い。テントサイトは鍬の沢を渡ったとこ
ろを整地して、二張りほどのスペースを作った。

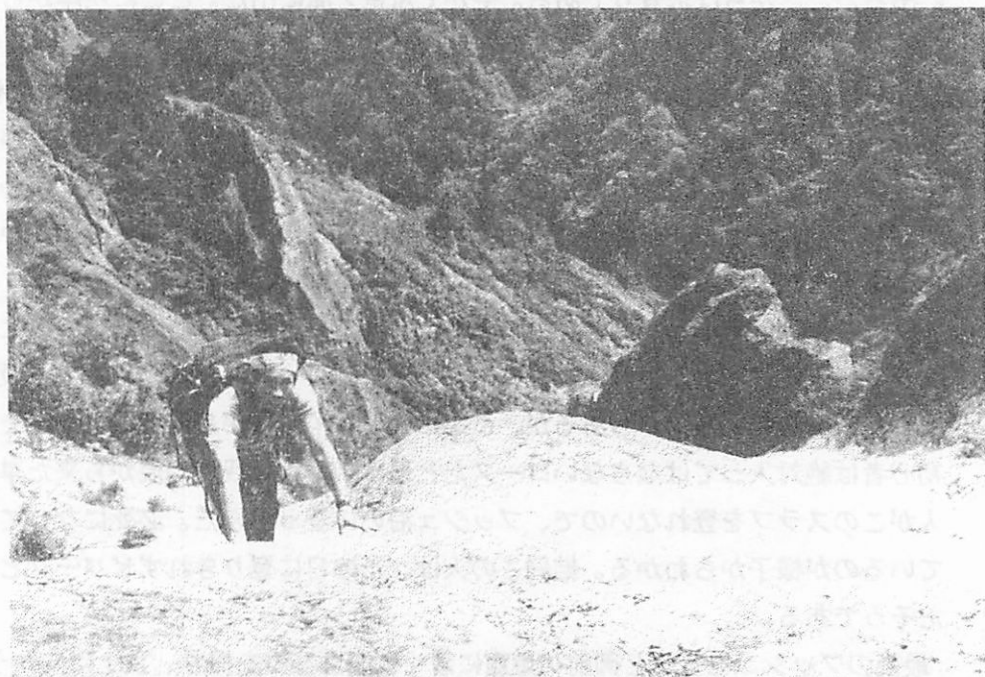
天気は下り坂とのことなので、荷物をまとめて早速出発する。鍬の沢右岸の道を行くが、道とは名ばかりで踏み跡程度のものである。歩きにくい道を進むと河原

に出る。ここからは沢登りである。やがて魚留ノ滝に出た。ここに左岸からシジミ沢が流入している。赤ペンキの目印があった。

シジミ沢に入るといよいよスラブの登攀だ。上部はニヨキニヨキ岩峰が何本も天を突いて、なかなかアルペン的だ。ここで私と笹沢さんはザイルをつけるが、他の人はノーザイル。笹沢さんはときどきスリッパし、ザイルにショックがかかる。その時、彼女はギャーともギューともつかぬ奇声を上げるのである。丁度かえるをつぶした時のような声だ。スラブは広大な幅を有し、傾斜も増してきた。ザイルパーティは傾斜の強いスラブのど真ん中をダイレクトに登る。ビレー用にハーケンを二、三本打った。しかし、このシジミ沢のルートは、ハイカーに一般向きとして紹介している向きもあるが、ここに一般ハイカーが来たら遭難ものである。初心者は絶対入ってはならないコースだと思う。事実、我々の後から来た単独の人がこのスラブを登れないので、ブッシュ沿いに登ってきた。必死になって登っているのが様子からわかる。結局この人は、この日に登りきれずピバークとなったそうである。

最後のブッシュを登ると御前ヶ遊窟に着く。記念写真を撮り、頂上に向かう。途中ボルトが二本ある所から被り気味の壁を直登したら、IV+の登攀を強いられて





御前ヶ遊窟、大スラブの登攀



御前ヶ遊窟 頂上（撮影、鈴木）

しまった。下りはソウケイ新道を下る。クサリ場が何カ所もある急な下りだったが、無事往路に出ることができた。

テントに戻って全員で薪を集め焚火をする。焚火はいいな。岩登りばかりしている頃は焚火はしたことはなかった。今はこうした山行が私は大好きだ。おつまみ、酒も豊富でつい飲み過ぎてしまった。川上なんかは頭だけがテントの中で首から下は外に出たまま寝ていた。

9月23日 空が白々してきたので、イワナを食べたことのない会員のため、釣りに出かける。しかし、釣れたのは小物ばかり。それに小生はあまり詳しくは知らないが、腹の紋様からイワナではなくヤマメだと思う。テントに帰る頃はひどいどしゃ降り、これを天プラにして食べたが、なかなかの好評であった。車に帰る頃は雨も上がる。時間があるので喜多方により、テレビに出た店と看板に書いてある店でイクララーメンを食べてみたが、あまりうまくはなかった。会津磐梯山へ向かう鈴木さん、笹沢さんと別れ帰路につく。

車止め (6:20) - テント場 (6:40~7:30) - 御前ヶ遊窟 (11:20) -

頂上 (12:05~12:20) - テント場 (15:00)

(本図 記)

会津磐梯山

91.9.24

パーティ L 鈴木操、笹沢ひろみ

前日の御前ヶ遊窟ではスラブを登り、やっとの思いで頂上に立ち、また夜はキャンプで盛り上がり、充実した山行だった。毎回山に行くと、「こんなこともできるの!」とか「すごい!」と感動してしまうくらい新しい発見が多く、興味をそられる。しかし、こけまくって体も痛い。そんなことも配慮して今日はのんびりハイキング。磐梯山の頂上まで。というのも婦長さんにゴマをすり5連休なのだ。残りの3日間実家でボーっとするのもつまらない。火曜日がお休みというSさんをお願いして今回の山行となる。

喜多方でおいしいラーメンを食べて、メンバーと別れ、磐梯ゴールドラインの最高点、猫魔八方台へ。よく整備された緑のアーケードをくぐり、ぱーと視界が広がり山容が見えると今日の宿となる中の湯温泉に到着。硫黄の臭いが鼻をつく。一軒宿のこの旅館はがんこな主人が昔ながらの湯治客を守っているという感じでなんと風情がある。湯ふねに一人つかって手足を伸ばし、「あー極楽」という言葉をつぶやいてしまう。

というわけでほのぼのの気分で次の日、いざ山頂をめざして出発。だらだらした樹林帯を登ると、前方には石岡の中学生の集団がいて騒がしい声が聞こえてくる。一時間半くらいで弘坊清水に到着。清水のわき出る広場で喉を潤し、大休止する。目の前には猪苗代湖が見えるはずなのに、何も見えない。登る途中、時々背中に檜原湖が見えていたが、南の方向は真っ白。頂上にいくまでにはガスが晴れますように、願いをこめて出発。急なガレ場をのぼりつめると頂上に到着。残念ながらガスっていて何も見えない。期待を裏切られがっかり。大型カメラでシャッターチャンスを待っている人たちもいたが、寒さにたえられず下山。下山で印象に残ったのは「磐梯山のおじさん」だ。年ははっきり覚えていないが80才くらいで、生きているうちに100回登る、と言っていた。若い頃、中の湯温泉で喘息？で湯治にきていたという。温泉のおかげですっかり健康になり、それ以来ずっとこの山を愛しているという。横浜からきたと言っていた。自分はポスターにもなったといって一枚の名刺をくれた。真っ赤なチロリアンハットに年代もののリュックサックを背負ってニコニコ笑っていた。なんとホノボノとしたおじいさんでやっぱり山はいい！と思ってしまった。

(笹沢 記)

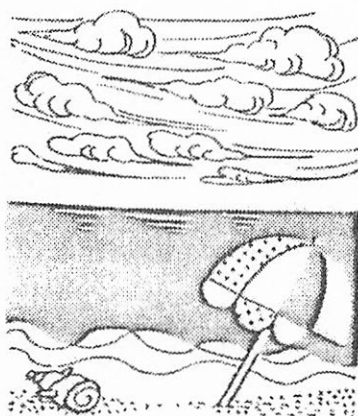


※編集後記

夏合宿も無事終わった。でも高田が手に4針も縫うけがをしたので、無事だったとは言えないかも知れない。我々はアルパインクライマーなので、落石の危険に遭遇することは多いといえる。人気ルート以外のルートは昔よりも浮石が多いので、これからはますます注意せねばならない。又、我々の好むルートは、あまり登られていないルートが多いので、その点でも危険は多いといえる。

当会も今までに、何人かのけが人を出しているが、幸いなことに亡くなった人はいない。これからは細心の注意を払って安全登山を心掛けていかななくてはならない。

(音菜台州記)



季報「岩と溪谷」第2号 発行1991年 夏

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J 茨城 茨城県新治郡八郷町柿岡1997 本図一統 方

編集者：土度助兵衛 音菜台州記
